

防災ラジオドラマ

グループ名「宮山会」

タイトル 「僕らは。」

●登場人物

吉田正・・・男の子。中学一年生。防災企画の立案者。爽やか系元気っ子。

増田紗枝・・・女の子。中学一年生。大真面目。

木戸・・・女の子。高校一年生。2人のサポーター

ちよつと下手なナレーション風に

正「私たちは、今年三月に発生した東北地方での地震をうけて、僕らの身近にある
防災について調査しました。」

正「と、いうわけで調査をしていきたいとおもいます！今回のメンバーは」

正「宮山学園中学校一年、吉田正と！」

紗枝「同じく・・・一年の増田紗枝です」

木戸「今回音声を担当いたします、宮山学園高校一年の木戸です。」

若干しーんとする三人。

木戸「こほん、げほっ。（大げさに咳払いする）」

正「(びっくりして)はっ、そ、それでは調査開始です！」走り去る足音

紗枝「・・・あ、そっちじゃない。」

木戸「地図ぐらい把握しなよ。」

ナレーション風に

正「皆さんは、もしもの時はどうしますか？」

木戸「ストップ」

正「え？」

紗枝「・・・もしも、ってどんな時？」

正「もしも・・・」

紗枝「実際に、シミュレーションしてみました。」

紗枝「私たちは宮山学園中学校にいます。今は三階の教室で理科の授業中で・・・

あ。地震がきました。」

ナレーション風に

紗枝「今回は地震の規模をマグニチュード7.5 宮山町では震度6を観測したという、設定でシミュレートを行います。実際の被災状況を想定してお送りしておりますが、避難指示に従って行動することをおすすめします。です。」

木戸「仮定だけだね・・・地震の揺れが収まるまでは机の下に隠れてろって習ったわ・・・」

正「小学校の時に訓練したので、大丈夫です！」

木戸「宮山学園があるこの地区には、沢山の住宅があるわね。阪神大震災では、住宅密集地で火事が発生して、延焼したケースが多かったそうよ」

紗枝「登下校のとき地震が来たらどうしたら・・・」

木戸「民家の塀の下敷きになって圧死したり、地震で電線が垂れ下がって、それに触れて感電とか。そういうことも起こりうるわね。」

正「まずは道路の真ん中に避難、ですね。」

木戸「基本的にはそうね。周りが安全ならば、登下校の道の近くの避難場所・・・田ここら辺だとテニスコートがある公園が広いし近いかな。そこに避難しよう。」

正「学校が近いなら学校がいいですね！」

紗枝「これも周りの状況しだい決めなきゃいけませんね。」

木戸「さて、そろそろ揺れもおさまる頃かしら。」

紗枝「揺れが・・・おさまりました」

正「よし、避難、ですね。」

木戸「ええ。でも周りの状況を確認してからね。危険なら、慌てて動いちゃだめ。」

紗枝「あ・・・先輩。教室に一番近い階段が壊れて使えません」

木戸「うーん、じゃあ、別の避難経路を考えましょう。」

正「避難経路かあ・・・あ、先輩、いい考えがありますよ！」

木戸「ん？」

正「じゃーん、避難経路マップをお借りしてきました！これでの確な避難行動ができますよ！」

木戸「おお、お疲れ」。最近防災教育の一環として、この避難経路マップを作る

授業がある学校も多いみたいね」

紗枝「地域の避難経路を考えるためには、ハザードマップも有効ですね。」

正「・・・この赤丸は消火器のマークだ。それから・・・この、えーいーでいー・・・ってなんだ？」

木戸「AED。自動体外式除細動器ね。心肺停止時に行う「電気ショック」という医療行為を、一般の人も正しく、安全に使えるようにプログラムされているわ。最近になって普及率も上がってきたそうよ。」

紗枝「こうやってみると・・・いろんな防災対策がありますね」

木戸「そうね。防火扉もその一例だね。」

正「・・・でも、外には消火器もAEDも置いてませんよ、先輩」

木戸「ああ、地区の公民館や自治会館、それからここら辺なら、コンビニや・・・

桜井駅にも設置されているわ。」

紗枝「・・・あ、保健室の横で、除細動機を見ました。」

正「おーいざという時のために覚えておかないとな。」

木戸「じゃあ、避難経路を確認してみましょう！」

正「はい！先輩！」

紗枝「おさない、はしらない、しゃべらない・・・ですわね！」

木戸「それじゃあ説明できないじゃない・・・実際はそうなんだけどね。えっと・・・

教室に一番近い階段が壊れてる、ということとは・・・」

正「次に近い、中央階段を使って避難、ですね！」

紗枝「・・・この掃除箱、倒れたら危ないな・・・」

木戸「ああ・・・普段使わない通路だからね。ここなら、椅子が放置されていたり、

机が重ねられた状態で置かれているので注意。」

正「先輩、この扉、「割れる」って書いてありますよ！」

紗枝「うちのマンションのベランダにある非常扉みたい。・・・でも、非常時に扉

が聞かないと大変だもんね・・・」

木戸「あ、余震にも気をつけなきゃ。避難中に余震が起きて・・・例えば階段を使

って皆が避難してる途中に起きたとしたら・・・」

正「将棋倒し状態になることも考えられますね・・・怖い。」

紗枝「先輩、もし通学中に地震が来て、避難しているときとかに余震がきたら・・・」

木戸「うん。ここら辺は住宅地だから・・・本震で家の塀が脆くなっているかもし

れないし、やっぱり道の真ん中に移動するのが最善じゃないかしら」

正「あの、171号線みたいのに、歩道が狭い、広い道路にいる時はどうしたらいい

でしょうか？」

木戸「広い道路は、救急車などの緊急車両が通るから、道路に飛び出ちゃだめよ。

避難できる場所・・・例えば中央分離帯がない171号線なら・・・お店の駐車場

に一時避難するのがいいんじゃないかな？」

紗枝「駐車場なら物が少ないですしね」

木戸「そうね。緊急時には公園と同じで炊き出しの場所になることもあるよね・・・。

あ、もうすぐ一階よ。」

正「あ・・・」

木戸「ん？どうしたの？」

正「あ、すいません、教室にSDカード忘れてきたんで、取ってきますね。」

紗枝「ダメ」

正「え？」

紗枝「命の方が大事だよ。正君」

正「そっか・・・そうだよね。」

木戸「よく言った、紗枝。大事なものは、目ごろから身に着けておくのも一つの手だよ。でも、先ず考えるのは生きることだからね。物はある程度取り返しが付くけど。人間の命はそうはいかないよね」

紗枝「・・・逃げましょう」

紗枝「校庭にできませんでした」

木戸「よし・・・。これでひとまず安心・・・だね。」

正「でも先輩、本当に外は安全なのでしょうか？」

木戸「うん？」

正「ほら、学校の外壁とか、電線とか。身近だけど、破損したり落下したら危険じゃないですか」

木戸「・・・たしかに・・・。」

紗枝「周りの状況を判断、です。」

紗枝「学校の中、たくさん設備があった・・・。」

木戸「最近は何震構造の学校に立て替えるところも多いしね。」

正「あ、でも家族と再会するには・・・？」

木戸「・・・不安なのはわかるけど、避難所を決めておいて、そこで待つのがいいんじゃないかな。地域のひとから何か情報が入るかもしれないし・・・」

紗枝「あ、震災の時には、緊急掲示板ができてました。そこに安否情報やその家族が避難している場所を書いた紙をはる・・・んですよね。」

木戸「ええ。余震で建物が倒壊することだってある。なるべくなら安全な場所にとどまって、家族を探しましょう。」

正「・・・では、これで今回の調査は一旦終了ですね・・・先輩はどうでしたか」

木戸「そうね・・・小学生の時から訓練とかはあったけど・・・実際はそうはいかないものね。今まで以上に気をつけなきゃいけないなあっておもったわ。」

紗枝「正君は？」

正「正直、防災設備なんて当たり前にあるし、なにかあってもどうにかなる、って思ってたけど、自分の命は自分で守らなきゃいけないんだな。って思った。それから、何気なくすごしてたけど、この街にも沢山の「防災」があった。僕も、誰かを助けることができるかもしれない。」

紗枝「地震は・・・いつ起こるかかわからないもんね・・・」

ナレーション風に

正「私たちの身近に潜んでいる、災害の恐怖と危険。そして、それが「起きたとき」の危険。命を守るためにも、もう一度確かめてみたいものですね。」

正、紗枝、木戸「制作は、宮山学園放送部でした」

ロボ音声「再生が、終了しました。」

正「できたあーっ！っ！」背伸び声。「うーっ！ん」みたいな

木戸「お、完成？」

紗枝「おつかれさまー」

再び音声を聞きながら

木戸「こうして見てきたけど、私はやっぱりまだ実感が沸かないんだよね。」

正「……はい。正直自分もそうなんです……」

紗枝「……災害が起きるって、考えたことはありませんけど……」

正「でも……起きるんですよね。明日か10年後か100年後かはわかりませんが……」

木戸「そう。でも、こうやって私たちがまとめたビデオで、視聴してるひとに災害の身近さと怖さを再確認してもらえたらいいね。」

紗枝「視聴している方々の命を守る事に、このビデオが役立つことを祈ります……」